
名刑事は囁く

山崎 佳実

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

名刑事は囁く

【Nコード】

N0428A

【作者名】

山崎 佳実

【あらすじ】

失踪事件に見せかけた殺人事件、その謎を解いたのは……

「ふあゝあ。」

朝っぱらだというのに間延びした声　一般に欠伸と称されるが
を歩道の真中です

る男の子、ランドセルを背負っているし、何よりその背格好ですぐ
に小学校の低学年と見
分けがつく。

「なあに光彦君、こんな朝から欠伸なんかして、昨夜はそんなに遅
くまで起きてたの？」

追いついてきたおかっぱ髪の女の子が不思議そうな顔で彼を見る。
「あ、歩美ちゃん、おはようございます、ええ、昨夜また遅くまで
ビデオを見ていたので。」

光彦くんと呼ばれた、顔にそばかすのある男の子は、目ざとくそ
の様子を指摘してきた

おかっぱ髪の少女に、その性格か両親の躰によるものなのか、或い
はその両方が絡んでいるのか分らないが丁寧な挨拶の後に欠伸をした言い訳をする。

彼は背は少し高く、そしてすらりとした容姿をグリーンのチェッ
ク模様のボタンダウン

と同系色のズボンに包み、彼女にさりげなく歩調を合わせる様に並
んで歩く。

「またあのビデオ見てたのか、光彦。」

歩美の向こう側を歩いていた、頭はスポーツ刈りで体格が良い、
と言うより少し肥り過

ぎだろ、と言ったほうが正確ではないかと思える容姿の男の子が声
をかける。

「あ、おはようございます元太君、そうなんですよ、早く寝なきゃ
いけない、と思いなが

らもついつい見ちゃうんですよ。」

光彦は元太の台詞に、いかにもそうなんだと言う表情を浮かべて相槌を打つ。

「『いやあ、家のカミさんがね』って、あれ、おもしれーもんな。」

元太がこめかみに手を当てて、独特のポーズをとりながら有名な台詞を言う、どうやら

元太も付き合ってよく見ているようである。

「大丈夫、光彦君？志保さんにお勉強してもらって、新一さんのお仕事を手伝って、それ

にビデオ見てるなんて、疲れちゃうよ。」

「大丈夫ですよ、勉強だって志保さんが体調見ながら教えてくれるし、新一さんの手伝い

だって毎日、と言うわけじゃないのですから。」

歩美が心配そうに言うのを光彦が笑顔で答える、志保さん、と言うのは阿笠博士の所に

いる宮野志保、彼女に縁あって家庭教師紛いをしてもらっている、がふたりの関係は師弟

では無い。

新一、と言うのはあの有名な高校生探偵、工藤新一の事であり、彼が探偵をしている時、

その助手をしていると言う事である。

尤も助手と言ってもまだ小学生である彼の事だから、それほどたいした事をしている訳で

はなく、簡単な雑用をこなす程度の事なので、ハードな事をしていくわけではない。

彼らが何故そのような人物と繋がりがあるのかと言う事は、既に読者諸兄には説明する

までも無いと思うので割愛させていただくが、二人が「黒の組織」と呼ばれる謎の組織壊

滅の後、元に戻ってもその交流は途切れるところかなお深まりつつ

ある、と言つても過言では無い。

「それにしたつてよ、光彦が欠伸なんてな！」

元太が笑いながら光彦のほうを向く、光彦は「いやあ」と、ちょっと罰が悪そうな表情

を浮かべた後、あ、ほら遅刻しそうですよ、急ぎましようとせき立てる。

「あ、そういえば光彦君、この間志保さんが宝石屋さんのウィンドウを見ていたの・・・」

「え？ほうせきやさん？」

「そう、お姉さんねえ、ちよとウィンドウのショウケースを見てた、何か欲しいものでも

あつたのかなあ。」

歩美の思案する表情を見て、光彦が考え込む。

志保のその様子を光彦はその日の学校帰りに目撃してしまい、彼女が見ていたショーウィ

ンドウを、後からこっそり覗くと、絶望的な表情をして大きなため息を吐き、力ない足取りでその場を離れた。

「おい浩二、いつまでそうやって我を張るつもりなんだ！いい加減俺の言う事を聞いたら

如何なんだ！」

ここはとある事務所の一室、道路に面した窓を背にして一人の男が大きな机の前に座っている、すぐ近くで道路工事をしている音が聞こえるが、窓の外の景色に人や車の往来や

工事の状況が見えない事から、少なくともこの部屋が1階にはない事が分かる。

金曜の午後の日差しが優しく差し込んでいるが、その光量では足りないのか、部屋には明かりが点いている。

どうやら男はせっせと何やら大きな紙に必死になって書き込んでいる。

その男の前で、眼鏡をかけた男が喜怒哀楽の内のどの表情であるか、と尋ねられたなら、回答者は全員、怒、と答えるであろうな表情を浮かべて立っている。

どちらもネクタイを締めているが、座っている男が技術系の人間であるのに対して怒りを表している男は如何見ても実業家、としか見えないでたちである。

「おい浩二！、人の話を聞いているのか！それとも工事の音で聞こえない、なんて言うん

じゃないだろうな、まったく五月蠅いっただらありやしない！」

男は工事の大きな騒音にもイラついているのか、半分八つ当たり気味である。

浩二と呼ばれた男は、それでも気にする風でもなく、大きな紙に何かを書いていたようだ

が顔をあげ、さ、出来た、とつぶやくと怒っている男のほうに笑みを浮かべて向き直り、

今まで書いていた紙を見せる。

「ほら、これが兄さんの新居の外観図だよ、良い家だろう。」

「そんな事は如何でもいい！、お前ここの所ろくな設計依頼が来ていないじゃないか！早

くこんな事務所なんか畳んで、俺の片腕として一緒にやってくれ！」

兄さん、と呼ばれた所を見ると、この二人どうやら兄弟のようである、そういえば雰囲気

気が良く似ている、あえて言えば、兄のほうは背が高くすらりとした感じがあるが、弟のほうは少しがっしり感じがする。

「『そんな事』とはないだろう、兄さん夫婦の新居なんだから、しかし兄さんがくると分かっていたら、この絵をもつて現場に一緒に行つたのに。」

また始まった、と言う表情を見せながらも浩二は兄に外觀図を見てもらおうと彼の面前

に出す、が兄はそれを無理やり脇へのける、その行為に浩二はむつとした表情を浮かべる。

「そうもいかん、仕事の途中でちよつと寄つただけだからな、現場はお前に任せる。」

なあ浩二、家も俺達が子供の時のような一介のスーパーじゃないんだ、不動産、レジャー

ー、スーパー、コンビニ、多角化で大きくなった、だが俺を助けてくれる身内はお前以

外はそう多くない、秘書の和也ぐらいだろ、こんな小さな設計事務所なんか畳んで、俺

を手伝ってくれ。」

「兄さん、俺は兄さんと違って、そんな器ではないよ、だいたい俺は建築設計家として世に認められたいんだ、それに・・・」

そこまで言つて浩二は急に厳しい表情を兄に向ける。

「兄さん、俺が知らないとも思っているのか！、あんたが裏で何をしているか！、俺へ

の設計依頼を片っ端から邪魔して、それに銀行にまで手を回して融資できないようにし

ているじゃないか！、俺の、俺の設計家としての夢を邪魔しないでくれ！」

浩二の台詞に兄の表情が変わる、どうやら彼の言つた事は事実ら

しい、兄はわなわなと震えている。

「だがどちらにしろお前の所はもう駄目なんだろう、資金繰りに行き詰っているじゃない

か、諦めて俺の所に来い、設計なら家の不動産部門で建売なり、特別の注文住宅でも出

来るじゃないか。」

この時の言葉が、彼に何かを決意させた、黒い塊のような決意を。突然、携帯の着信音が鳴る、兄はポケットから携帯を取り出すと耳に当てる。

「ああ私だ、ああ、その件ならこれから軽井沢に行く、ああ、先方とは今夜会食をして、

週末は物件を見がてら、リゾート地でゆっくりしてくるよ、月曜には戻るから来週のス

ケジュールはその時に確認させてくれ。」

兄は浩二に背を向けて話している、どうやら彼の秘書が何かからの電話らしい、浩二は

それを聞きながら部屋の隅にあるコーヒーマシンから二つのカップにコーヒーマシンを注ぐ、

その表情に暗い影が宿る。

背後で兄が今度は携帯で何処かに掛けている。

「あ、私だ、どうだい旅行の方は？、久々だろ、実家のご両親と一緒に過ごすのは、え、

私、だから言っただろ、仕事が入って行かなくなったって、ああ……あ、それか

ら私は日曜の晩まで向こうにいて、月曜の朝にそのまま会社に行くから、君は日曜の晩

に帰ってくるんだっけ……なら家には帰らず、実家に一晚泊まってくるという、月曜

の晩、迎えに行くよ。」

妻への電話だろうか、実家の両親と旅行をさせるなどとは随分理解のある夫のようである。

そういつて通話をきくと、再び何処かへ電話する。

「ああ、私だ、これからそちらに向かうよ、ああ、月曜日にこちらに帰って来ることになる

っているから、ああ、分かっている、妻？、妻は旅行中だから大丈夫だ、そちらに着い

たらまた連絡するから、こっちには連絡しないようにな、じゃ、また。」

そういつて今度は優しい声で何か言うと再び通話を切る。

「兄さん、まだあの女と続いていたのか、義姉さんに悪いと思わないのか？」

浩二は兄にコーヒークップを渡しながら責める様に兄に言う。

「洋子は納得済みだ、それよりも此処も終わりだ、早く来い、浩二。」

そう言つて彼はカップのコーヒを一口すすする。

次の瞬間、兄は、ぐは！、と叫ぶと、飲んでいたコーヒを吐き出し、持っていたカップ

を落として屑折れるようにして倒れる。

「こ、浩二・・・」

そのまま喉を掻き毟る様にして白目をむく。

「お終いなのはアンタの方だよ、兄さん。」

暗い眼をして呟いた浩二の声は、工事の騒音にかき消されるだけでなく、既に兄の耳に届いてはいなかった。

「アイツ、何やってんだ。」

新一はそうつぶやくと、小さく舌打ちして、ずんずんと歩み寄る。

その先には長い黒髪を独特のヘアスタイルして学生鞆を両の手で提げた少女が、少し困った様な表情をして立っている。

学校も終わって今日も帰ろうとして、校門で待ち合わせていた相手が難儀しているようなのだ。

彼女が困った表情をしているのはおそらく、彼女に正対している男の所為であろう、年の頃は20代後半か、スーツを上手に着こなしてどこから見てもサラリーマン、と言う感じの男である。

（くそ、週明け早々何だってんだ、蘭も蘭だ、あんな男、一寸空手技で脅しちまえば良い

ようなものを）

内心で悪態をつきながら、それでも何でもない、と言う表情で二人に近づいていく、どう

やら彼女が軟派されていると新一の目には映っているらしい。

「よう、蘭、何やってんだ、こんな所で。」

その瞬間、彼の方を振り向いた蘭の表情がぱっと明るくなる、そして次の瞬間、彼女の

思いもしない言葉が今度は新一を混乱に陥れる。

「あ、来ました、彼が工藤新一です、新一、アンタにお客さんよ。」

「へ？俺に客？」

彼の頭には？マークがいくつも浮かんでいる、それにかまわず、スーツ姿の男は彼に急

ぎ駆け寄ると噛みつかんばかりの勢いで頼み込む。

「お願いです、社長を捜して下さい。」

「ちょ、一寸待って下さい、失礼ですが貴方は？」

新一は両手で彼を押し戻すしぐさをすると、相手に尋ね返す、男はあ、失礼しました、

と慌てて胸ポケットから革の名刺入れを出すと、一枚渡す。

「豊田グループ社長秘書、五十鈴和也さん、ですか・・・」

名刺と男の顔を交互に見やって、新一は怪訝な顔をする。

「社長を捜して下さい、とのことですが・・・」

「金曜の午後から行方不明なんです！」

「行方不明？」

新一は厳しい表情を見せて再び聞き返す、和也は頷くと、此处で立ち話は何ですから、

と促す、まあ学校の校門ですするような話ではない。

「その前にお聞きしたいのですが、何故蘭、あ、いや、彼女に僕の事を尋ねたのです。」

新一は、疑問を口にする。

「え、ああ、最初鈴木園子さんが御学友だと伺っておりましてので、そちらにお伺いしま

したら、毛利蘭さんに伺った方が早い、と仰られましたので・・・

「

丁寧なしゃべり方は職業柄の癖なのだろう、しかし出てきた名前に二人はかあつとなる

「「園子のヤツ」」

二人は声を合わせる、いや、傍から見れば園子の言うとおりだ、と声がかかりそうな状況である。

「あ、新一さんだ！」

そこへ可愛らしい声がかかる、その声のほうを見れば小学生3人組、いわずと知れた吉

田歩美、小嶋元太、円谷光彦、所謂自称少年探偵団、である。

「お、どうした、事件か？」

元太が目を輝かせて近寄ってくる、二人が後に続いて走ってくる。「こら、首を突っ込むんじゃない！」

新一は怖い顔をして見せるが、3人とも動じる気配は無い、それ

どころか早くもまとわ

りついて内容を教えろ、と騒いでいる。

「この子達は？」

呆氣にとられた和也が新一に尋ねる。

「新一の助手みたいなものです。」

蘭が苦笑しながら答えた。

「秘書を雇っている社長さんだから、もつとすごい所に住んでいるのかと思ったけど、案

外普通のマンションに住んでるんだな。」

元太が遠慮もなしにずけずけと言う、新一と光彦が睨んで、慌てて彼は首を竦めた。

「此処は一時的に借りてるだけですの、実は今、自宅を建て直しているところですか、そ

れにセキリティがしっかりしているので安心なんですよ。」

マダム、と言う言葉がとても良く似合いそうな婦人が、子供たちにはジューズとお菓子

を、新一と蘭にはコーヒーを差し出しながら元太の言葉に答える、光彦と歩美は、ああ、

そうか、と言う表情をする。

此処はマンションの応接室、客の席側には蘭と新一、少年探偵団がすわり、反対側には社

長夫人と彼らを連れて来た秘書の五十鈴和也が腰掛けている。

「では確認させていただきました、御主人の豊田洋一さんが金曜の夕方から行方不明との事

なんですネ。」

「そうです、金曜の午後、私に電話があって、仕事で旅行に行かれなくなつた事を詫びて

ました、声を聞いたのはその電話が最後です。」

「私は社長に今週のスケジュールを確認する為と、週末に行かれるはずだった商談の件で

社長の携帯に電話しました。」

「行かれるはずだった？」

和也の言葉に、新一が鋭く言葉を挟む。

「ええ、実は今、当社で軽井沢にリゾートを持つ話が進んでおりまして、社長は週末にそ

の物件の視察を兼ねて、先方と話を詰める予定でした。」

「社長は、その席に現れなかった？」

「そうなんです、私は東京に残っておりますのですが連絡が上手くつかなかった様で、

社長が先方との席に現れなかった、と分かったのは、今朝の事だったのです。」

新一の問いかけに、彼は後悔の念を滲ませる様な口調でそう説明する、確かに秘書として、社長の公務の側にいなかった、と言うのが責任を感じさせているに違いなかった。

「ただ、今朝、私にメールが来たのよ、いつもならそんな事しないのに、『嫌になった、

しばらく旅にでる。』って。」

そう言って洋一の妻は自分の携帯の画面を見せる、確かにそこには言われた通りのメールが表示されている、秘書の和也も頷く。

「社長は別に悩みなどを抱えている風でも無かったですし、事業も順調でしたので、失

踪するような理由など思い当たらないのですが。」

「そうでしょうねえ、このご時世に軽井沢でリゾートを始める、と言っくらいでしょうか

ら。」

新一は確かにそうだろうな、と思った、軽井沢にリゾートを持つ

話といい、自宅を建て

替えるのにこれだけのマンションを用意する事といい、事業は順調であろう、と察しはつ

いた、となると私生活だろうが、今の奥さんの様子からは難しい様子は見て取る事は出来

ない、とりあえず今の所は。

「この件は警察には既に。」

「はい、とりあえず行方不明と言う事で、メールと言う連絡があったので余り心配要らないのでは、とも言われましたが・・・」

新一の問いに奥さんは力なく答える、確かに本人からのメールがあると、そのように考えるのも妥当であろう。

「ただ社長には失踪する理由など見当たらないのです。」

和也が断言する、確かに発作的に失踪するとは考え難い。

「そうですね、一寸失踪と考えるにはおかしい部分もありますね、では質問させていただ

いてもよろしいですか。」

それまで黙っていた子供、光彦が口を開く、新一は余計な事を、と言う表情をちらりと

見せたが何も言わない、洋一の妻も突然子供が口を挟んできたのに驚くが、新一が連れ

て来たこともあり、また秘書から助手、と言われていたので無理に微笑を作りながら答える。

「ご主人がお出かけになった時の服装とか、もって行かれたものなんて分かりますか？」

新一は、お、っという表情を見せる、確かにいなくなったときの状況が少しでも分かれ

ば何かの手がかりになるかもしれない、取っ掛かりとしては十分に

合格点が与えられる。

「そうねえ、どうもいつものスーツを着ていったようだし、着替えは私と一緒に行くはず」

だった旅行のをそのまま持っていったみたい。」

妻は確認をしてみる、と立ち上がって別室消える。

「秘書さんは、社長さんの秘書になつてどの位？」

今度は歩美がジュースのグラスを持ちながら秘書に尋ねる。

「そうだね5年くらいかな、社長さんとは父方の従兄弟でね、社長はなるべくこの会社を

身内で固めたいらしくて、本当は社長の弟さんにも入って欲しいらしいんだけど、弟さ

んは建築設計事務所を開いていてね、賞なんかも取ったりしているんだ、今度立ててい

る新居も、弟さんの設計だつて言っていたなあ。」

「どうやら少し気が和らいだのと、相手が子供、と言う事もあつて話し方が砕けたようになる。」

「社長さんは幾つ位なんだ。」

今度は元太が尋ねる、前二人が質問をしたので自分も何か、と思つたらしい、和也がそ

ういえば、と言う表情をする、まだ社長のパーソナルデータを殆ど渡してないのだ。

彼は一枚の写真をテーブルに置く来ながら話し始める。

「豊田洋一、38歳、ご存知の通り豊田グループの社長です、奥様は章子^{あきこ}さま

、お二人にはお子様がお一人いらっしゃいます、ご存知の通り、豊田グループ、と言つ

ても田舎企業ですが、地元のスーパーから始まってコンビニ、不動産、パチンコ、ディ

スカウントストアなどに手を広げていました、で、この度軽井沢

に良いリゾート物件が

出たのでこの方向にも進もう、として。」

「先週末当地へ向かった、と言うわけですね。」

「そうなんです、先方の都合でどうしても先週の金曜日しか時間が取れなくて、それで奥

様との旅行を諦められた訳です。」

新一の相槌に彼は事情を話す。

「豊田グループと言えば、此処20年くらいで手を広げられたんですよね、結構敵も多か

つたんじゃあないですか？」

新一が突っ込んだ質問をする、誘拐等の犯罪絡みを想定しているようである、確かにこ

れだけの人物であれば誘拐、と言う線も捨て切れない。

しかし彼の返事は意外なものであった。

「とんでもない！人に恨まれるなんて、事業拡張だって、先代は余り積極的ではなくて、

知り合いの苦しくなった事業を引き取ったのが始まりですし、そういうものはすべて先

方から話があって始めたものなんです、しかも先方の言い値で引き取るのですから恨ま

れるはずありません。社長もそのやり方を引き継いでますから社長を悪く言う人の話

は聞いた事無いですね。」

身びいきの話半分と聞いていても差し支えないかな、と思いながら、あながち大げさな

話では無いだろうと新一は推測する、確かに豊田グループの噂は新一も耳にした事がある

が悪い噂と言うのは滅多に聞かない。

この時点で怨恨による誘拐等はかなり薄いのではないか、と言えるそうである。

後は身代金目的による誘拐であるが、それならば既に犯人側から何らかの接触があつて然

るべきだし、あのようなメールを送る意味が無い。

失踪する理由も無く、誘拐の線も薄い、何やら薄気味悪ささえ感じる。

（まさか自分の時のように何らかの事件に巻き込まれたとか・・・。）

「ねえ新一、もしかして社長さん、何らかの事件に巻き込まれて帰ってこられない状況な

んじゃないかしら。」

蘭が自分と同じ事を考えたらしい、確かに自分が小さくなった時の彼女にとつた行動を考えると、確かに自分が小さくなった時、考えればむべなるかな、と言う感じであるが、だとしたら厄介だ、それにそうであればメールの内容にも理解できる。

がしかし、新一は蘭にあいまいな返事をする、そう判断するのは早い、と言う表情で和也に質問を続ける。

「社長の交友関係ではいかがでしょう、最近お知り合いの方とトラブルがあつたとか、或

いは女性関係とかは？」

「そ、それは・・・。」

その言葉に和也の顔色が代わる、何かある、と新一は直感する。

「実は社長には・・・。」

「やっぱり旅行用に揃えておいた物が無くなっているわ、おそらくそれを持っていたんだ

と思うわ。」

そこまで言いかけた時に妻の章子が戻ってきたので和也は口をつぐむ、どうやら章子には聞かせられない話らしい。

「それで。」

元太が話の続きを促すが、彼は歯切れが悪い、新一が厳しい目で元太を睨む、彼はちえ、

分かったよ、と不満そうな顔を浮かべる。

「あの人、車で行ったみたい、ディムラーが無いから。」

章子の言葉に光彦が良く分からない、と言う表情を浮かべる。

「ディムラー、と言うのは英国ジャガーの中のブランドの一つだ、高級車の一つだよ。」

新一は光彦に分かり易く説明する。

「へー、俺はまたディムラーの親戚かと思っただぜ。」

「それはあながち間違いじゃない、元々ディムラーがイギリスで作った自動車メーカーな

んだから。」

元太の台詞に新一が解説を細くする、元太は、へー、そうなのかと感心する。

「社長さんはお車が好きなんですか。」

光彦がジューズを一口飲みながら尋ねる。

「そうね、他に余り趣味は無いけど、車が趣味かしら、今乗っていったの他にも2、3

台持っているけど、今一番のお気に入りあのディムラーじゃないかしら。」

歩美がへー、とこれまた関心したように言う。

そこへ来客を知らせるチャイムが鳴った。

「何方でしょう?。」

「きっと浩二さんじゃないかしら、午後からこちらに来るって言うてらしたから。」

和也の問いかけに章子は事も無げに答える。

「浩二さん、って言うのは。」

「主人の弟ですわ。」

光彦の声に再び章子が答えた。

「へえ、この少年があ有名な工藤新一さんか、初めまして、俺は豊田浩二です、宜しく。」

浩二は笑顔で挨拶すると、応接セットのあいた席に腰掛ける。

「それで兄さんから連絡は？」

章子の方に向くと浩二は早速用件に入る。

「今朝一度、メールが届いたわ、『旅に出る。』って。」

表情を曇らせると、彼女はそう話しながら先程新一達に見せたメールを浩二にも見せる。

浩二はそれを見ると一寸考え込んだ後、わざと明るく振舞うようにしゃべりだす。

「何か兄さんらしく無いメールだけど、でもとり合えず無事みたいだから良かったじゃな

いか、全く兄さんも人騒がせだな、金曜日に会った時はそんな素振りぜんぜん見せなかったのに。」

その言葉に全員が注目する、浩二はえっ、と言う表情になる。

「社長、金曜日にそちらにお見えになったんですか？」

「ああ新居の件でね、でも直ぐ帰ったよ、何か用事があったみたいだから。」

和也の言葉に浩二は驚いた風に答える、どうやら寄った事を知らなかったらしい、新一達も浩二の顔を見つめる。

「いや、新居の外観の色でね、マッチする色はどんなのだろう、って相談されただけなん

だけ。」

「ああ、そういえば気にしていたわね、あの人。」

浩二の言葉に章子は思い出したように言う、確かに時間をかけて決める事では無い、お

そらく何かのついでに寄ったのだろう、と言う感じである。

「浩二さん、差し出がましいようですが、この様な事態ですのでぜひ豊田グループに来て

頂きたいのですが・・・」

「いや、その必要は無いだろう、兄には俺はグループには入らないと言つてあるし、金曜

日に兄さんもそれは了承してくれた、そうそう、こんな時に言うのもなんだけど、兄さ

んが設計事務所の方も応援してくれると言つてくれたんだ。」

章子と和也は意外と表情を見せる。

「でもこんな時だし、浩二さんに来てもらえたらとても助かるのだけど。」

章子は不安そうな表情を浮かべると浩二に再考を促す、が彼は優しい笑みを浮かべて彼女を見据える。

「いや、俺には無理だよ、俺には経営者としての才はないし、例えばピンチヒッターと言え

ども兄さんの変わりは無理だよ、それより義姉さん、貴方がしっかりしていなきゃ、大

丈夫、きつと直ぐに帰ってくるから。」

彼は章子の手を取ると励ます、彼女は分かったと言うように頷くと俯いてしまう。

其処へ電話のベルが鳴る、章子が一瞬びくつとした後、おずおずと受話器をとる。

名前を言った後、はい、はい、と何回か短い返事をして、最後に有難うございました、と

いつて受話器を置く。

「何処から？」

浩二が気安く尋ねる、彼女が少しホツとしたような表情を見せる。「あの人の車があつたつて、東京駅の地下駐車場にですつて。」

「社長の車が？」

彼女の言葉に同じく少し安心したような和也の言葉がでる。

「じゃあやつぱり兄さんは旅に出たんじゃないかな、で今のところ誰にも会いたくないか

らメールでとりあえず無事を知らせたんじゃないかな。」

浩二がホツとしたような言い方をする。

新一も蘭もどうやら結論が出た、と言うような表情である。

元太も歩美も出番なし、と言う表情と、良かったという表情を半々にしながらもとりあえずはジューズを口にする。

ただ1人、難しい顔をして光彦だけが腕を組んで考え込んでいる。

「さあ、帰ろうか、」

新一が席を立ち上がる、皆もそれにつられて立ち上がる、光彦も考え事をしていたがそ

れに気づいて慌てて立ち上がる、そして挨拶をして立ち去ろうとした時、不意に振り返って章子達に尋ねる。

「あの、変な事お尋ねしますけど、社長さんって車を飾っておくのが好きなんですか？」

3人は顔を見合わせてしまう。

「いいえ、運転が好きなの、そう、一寸でも暇があるとドライブなんてしょっちゅうよ、

どうして？坊や。」

「いえ、そんなに車好きの社長さんが、何で車を降りて旅行に行っただんでしょう、車で勝

手気ままに行く方が良いでしょうに・・・あ、余計な事でしたね、失礼しました。」

3人は再び顔を見合わせると不思議な表情をする、慌てて和也が送ります、と席を立つ。

「五十鈴さん、先ほど交友関係の質問をされた時、何か言いかけてましたよね、あれは何だ

「ったのですか？」

新一がマンションの1階エントランスで、不意に和也に問いかける、彼もそれを待っていたような雰囲気がある。

「実は社長には女性が居るのです、それかなり以前から付き合いのある、そう奥様より

も前からお付き合いしている女性が。」

とんでもない爆弾発言である、新一が事の真相を問いただそうとする前に彼は話を続ける。

「これは私も直接見ていたことではないので事の真相は分かりませんが、その女性と社長は相思相愛だったようでして、結婚の約束までしていたそうです、ところが何かの席で

奥様が社長を見染められて熱烈にアタックされたそうです、奥様はやはり某財閥のお嬢

様で、様々な手を使って社長と結婚されたそうです、ですがその後その女性とは続いていたようです。」

新一はあの夫婦にはそんな過去が有ったのか、と心の中で呟く、此処で新一の中に何かが浮かび上がってくる。

「その方のお名前とか分かりませんか？」

「えーと、確か鈴木・・・そう、鈴木諒子だったと思います、一度何かで聞いた事があります。」

新一が鈴木諒子さんねえ、と呟いた。

「ねえ新一、一寸家に寄っていかない？みんなもお腹空いたでしょ、

お姉さんが何か作ってあげる。」

この言葉に少年探偵団の面々は歓声を上げる、確かに夕飯には一寸早いが小腹の空く時間だ。

建物脇の階段を上って、自宅に入る途中の事務所前で、蘭は人の気配に気付く。

「ただいまー・・・あ、お客様？」

中年女性の後姿を見て、彼女はドアを開けたところで立ち止まる、その後ろを少年探偵団の面々が覗き込んでいる、どうやら先程の依頼が不発だったので新しいターゲットを見つけてうずうずしているようだ。

しかし小五郎への依頼客は正式なビジネスとして大人の依頼であるから、少年探偵団にしてもおいそれとは口を挟むわけには行かない、だからおとなしくしている、蘭は事務所のドアを閉める。

「おう、すまないがお茶出してくれねーか、あ、スイマセン、こいつは私の娘でして。」

蘭はいらっしゃいませ、と言いながらお茶の用意を始める。歳の頃なら30半ば、と言った所であろうか、決して美人、と言うわけではないが素敵な感じがする女性である、生活感が無いのと指輪をしていないところを見ると独身のように推察される。

（私も新一に影響されたのかしら）

そこまで推理している自分に気がついて蘭は内心苦笑する、父親譲りと考えないあたりはさすがと言つか、もっともこれを小五郎が聞いたら怒るであろうが。

「蘭、こちらは鈴木諒子さんといって豊田グループの秘書をしているそうだ。」

紹介された女性が、ソファに座ったまま会釈をする、蘭の目が大きく見開かれる、挨拶を忘れる程の驚愕。

それでもお茶を出すと慌てて事務所を出る。

その様子を見ていた小五郎が、いや誰に似たんだか、がさつな娘で、失礼しましたと苦笑する。

「新一、しんいち、大変、今あの愛人の鈴木諒子って人が来てる！」
外で待っている皆に小声で話す、途端に新一の目つきが変わる、

少年探偵団のメンバー

もどつやらさらにうずうずが高まっているようだ、なんとか中に割り込みたいのだ、しかし

し新一に一睨みされて大人しくなる。

「私がそれとなく様子を見てくるわ。」

蘭はそう言うとういんくして事務所に戻る。

「つまり失踪された社長を捜して欲しい、と、こつ言つ訳ですな、
ところで警察への搜索

願は？」

「いえ、まだ、余り表沙汰にいたくございませんので……」

彼女は歯切れ悪く答える、心なしに落ち着きが無いようでもある、
蘭はさり気無く、邪

魔にならぬように小五郎の隣に座り、事務員代わりに書類を取る真似をする。

「いけませんなあ、今では警察も事を大きくせずには搜索をしてくれますから、先ずは警察

へ搜索願を出されたほうが良いでしょう、因みにこの件に関して
社長のご家族の方のご

意向は？」

「それもまだ・・・」

相変わらず齒切れの悪い彼女である、事情を知らないとは言え、小五郎も何か感付いて

いるのかも知れない、煙草に火をつけるとふー、っと煙を吐き出した。

「と言う事は会社の中で合意されてこられた訳では無さそうですね、秘書さんの御一存で

すか？その辺の所をはっきりさせて頂けませんか。」

「・・・私の、秘書としての一存です・・・」

か細い声でそれだけの事をやっと言葉にする。

小五郎はその様子を見たあと、事務所の天井を見上げながら思索している、そしてもう一

度煙草を吸うと蘭と依頼人が見守る中、急に立ち上がって事務所の窓の方に向かう。

「分かりました、本来でしたらこのようなご依頼はお受けしないのですが、今回は特別と

言う事でお受けいたしましょう、なにこの名探偵毛利小五郎に任せておけば御安心です、

なー！はっはっはっは！」

明るい声で彼女に話しかけると最後はいつもの笑い声になる、蘭はもう！お父さんった

ら、女性には甘いんだから、と内心呆れながらもとりあえずほっとする。

依頼者はホッとした表情を浮かべると、何度も深々と頭を下げる。

彼女が事務所を出るのを送る振りをして依頼人と一緒に蘭は事務所を出る、そして階段を

下りたところで改めて彼女に声を掛けた。

「鈴木諒子さんですよね。」

「はい、何でしょう。」

彼女は訝しげに蘭を見る。

「実は折り入ってお話をお伺いしたいのですが、宜しいですか。」
そう言つと蘭は彼女になつこり微笑みかけた。

彼女を連れて、このビルの1階にある喫茶「ポアロ」に入る、程なくして新一達も入店して彼女の傍に座る、諒子は彼等の出現に表情を強張らせる。

「お楽になさってください、僕は工藤新一、高校生探偵です、ここに
いる子供達は・・・」

まあ助手のようなものです。」

新一は苦笑しながら少年探偵団を紹介する、彼らは軽く会釈する。
彼の名前を聞いた瞬間、諒子の目が大きく開かれ、あの有名な、と
絶句する。

「実は先程、豊田グループの秘書から社長が行方不明なので探して
欲しいと依頼を受けま

してね、でその折、その秘書からあなたの事を御伺いした訳です。

「

彼女の顔がどんどん強張って行く、つまりは新一は彼女が洋一の
秘書ではない、と言う
事を見抜いているのだ。

彼女が席を立ちかけた所で新一は待つて下さい、と慌てて合わせて
腰を浮かす。

このような形で自分たちの関係を暴露されるのは彼女としても本意
ではない、こんな時は
早々に立ち去るのが良い、と判断するのは当然の事であろう。

「私、急いでいますので・・・」

「まあ、すぐ済みます、不躰で申し訳ありません、実はどうしても
2、3御伺いした事が
ありまして。」

素直に新一が頭を下げる、此処で彼女に逃げられては元も子もな

い、彼は必死で止めに入る。

彼女は不承不承ながらも席に着く。

「何でしょうか。」

彼女の言葉と声には棘がある、新一は笑顔を作りながら彼女に正対して話し始める。

「鈴木さんの事は秘書の方から少し伺いました、失礼ですが鈴木さんは週末、豊

田社長とお会いするはずだったのではないですか？それも軽井沢で。」

彼女の表情が一瞬だけ変わるがすぐ元に戻る、確かに身分を偽って人探しをお願いする

のだ、そのくらいの推理は当然であろう、と彼女も思い至ったのであろう、確かに新一に

してみればこれは推理以前のことである。

「そのような事、貴方には関係無いでしょう。」

この台詞は彼に告白したも同然である、新一の瞳がキラリと光る。「私は社長が何らかの事件に巻き込まれた可能性が高いと思っています。」

新一の言葉に諒子が蒼ざめる、彼にしてみても確証はない、何しろ物証が何もないから、

しかし有名な高校生探偵と言う彼の立場が、彼女の社長との関係と言う立場を含めて

与えた衝撃の大きさを彼女の表情が示していた。

諒子は震える手でコーヒークップを取り、一口だけ飲むと心を落ち着かせるか、思考を

まとめるためか、瞳を閉じる。

しばらくじっとしていた後、やっと落ち着いたのか彼女が目を開く、その瞳に怯えも刺々しさも無い。

「確かに洋一と私は軽井沢で週末を過ごす予定でした、向こうでリゾート物件の出物を紹

介されたので見に行くからと言って、私は一足先に軽井沢へ向かって、ホテルで落ち合

う予定でした・・・」

「しかし社長は現れなかった。」

新一の言葉に彼女はゆっくり頷く、彼は諒子が社長を名前で呼ぶことに関係の深さを感じていた。

「失礼ですがこの様な事は以前にもあったのですか？」

新一は相手を思いやるような声で質問をする、彼女は首を横に振って答える

「洋一が土壇場で来られなくなる事は無かった訳では有りません、なんと言っても社長で

すし、家庭もある人ですから・・・只そんな時は必ずその前後に連絡が有るのです、

今回のような事は初めてですわ。」

「泊まれたホテルは？」

「仙平ホテルです、当然洋一の名前で予約してありました。」

新一の質問に彼女は細かく答え始める、どうやら協力的になってきたようである。

隣では光彦が必死になってメモを取っている、小学生だから難しい漢字は書けない、勢い

平仮名が多くなる、本人は必死なのだが傍からみれば可愛い、と言う言葉以外は当てはま

らない、新一は本格的な助手になるのは当分先の事だな、と内心苦笑する。

「ところで社長と最後に会われたのは何時だかご記憶ございますか。」

新一は丁寧に尋ねる、諒子は少し思い出すような仕草をした後、

先週の火曜日です、そ

の時に今回の軽井沢行きを言われましたので、と答える。

「それが最後？」

「ええ、会ったのは。」

新一の重ねた質問に、彼女は含みのある答えを返す。

光彦が電話か何かでは？と畳み掛けると彼女は頷く。

「最後に電話を貰ったのは金曜日の午後、これからそちらに行くから、とあったのが最後

ね、その後は何も音沙汰が無いの。」

彼女は其処まで言うのと、わっと泣き出す。

しばらくその場に重い空気が流れる、光彦が頃合を見計らってハンカチを渡す。

彼女はそれを制すると自分のハンカチを出し、取り乱してすいませんと頭を下げる。

「その金曜日以降、メールとかも無いのですか？」

光彦が確認を求める形で尋ねる、彼女はこくり、と頷く。

「社長さんの携帯にはおばさんの携帯番号やメールアドレスも入っているんだろ、連絡し

てくれたって良いじゃないか、奥さんにはしたんだから。」

元太が不用意な発言をする、彼女は、そう、奥さんには連絡があったの、と答える、新

一と光彦は余計な事を、と言う表情をするが鈍感な元太は気がつかない。

「ああ、旅に出る、探さないでくれ、ってメールがあったらしいぞ。」

元太君！と歩美が諭す、諒子がそう、奥さんにはあったの、と言って再び悲しい表情を

見せる、元太は自分がやっと言ってはいけない事に気付いて慌ててごめん、と言う、皆か

ら非難の視線を浴びて、だって、と言いながら俯いてしまう。

「ごめんなさい、変な質問していいですか？社長さんの携帯にお姉さんのメールアドレスや携帯番号って登録されているんですよね、それって誰が見ても分かるようになっています？」

光彦の声に諒子は再び顔を上げる、かなりプライベートな事であるが光彦が真剣な表情で聞いてくるので思わず答えてしまう。

「いいえ、誰かに拾われたり、奥さんに見られたりした時に困ると言うので分からないよ

うになっている、って前に言っていたわ。」

そうですか、と光彦がやっぱり、と言う表情で頷く。

「あの、私そろそろ失礼させていただいても宜しいですか？」

「あ、お呼びとめしてすいませんでした、もし何か分ければご連絡させて頂きたいのですが。」

新一が一礼して御礼を言うと彼女に連絡方法を探ねる、彼女が携帯の電番を紙に書いて渡す。

「あ、すいません、最後にひとつだけ聞いて良いですか。」

光彦が気がついたように尋ねる、諒子は良いわよ、何？と笑顔で尋ねる。

「社長さんは会いに来る時、車で来る様な事は無かったのですか。」

光彦の問いかけに一寸驚いた表情を見せた後、再び笑顔に戻ると彼に向かって答える。

「いいえ洋一さんは車が好きだったから、しょっちゅう車で来たわ、結構ドライブなんか

もしたのよ、でも何故？」

「いえ、さっき東京駅の地下駐車場で社長さんの車が発見された、と言うから、軽井沢へ

は電車で行ったのかなあ、と思って、車がお好きなら車で行っても良いと思っただんです

けど、お姉さんに会うには車があってはいけないのかなあ、思っただものですから。」

「あら、へんねえ、火曜日に会った時にも軽井沢はドライブに丁度良い距離だし、向こう

で車があっただほうが便利だから、って言っていたから。

それより無理してお姉さんなんて呼ばなくても、おばさんでいいわよ、もうそんなに若

くないんだから。」

一寸意外、と言う表情を見せた後、諒子は光彦に微笑んでおでこをちよんとつつき、会計を済ませると店を出て行った。

「新一さん！」

光彦は振り返ると新一に向かって叫ぶ、新一は頷くと携帯を取り出して電話をかける。

「あ、もしもし、目暮警部ですか、工藤です、実は至急調べていたきたいのですが・・・」

「それにしても社長は何処に居るんでしょうね？」

光彦と新一が並んで歩く、新一は帰宅途中、光彦は阿笠博士の所へ、もつと詳しく言う

のならば阿笠博士の所の志保の所へ勉強を見てもらいに行くのである。

「それだよなあ、最初は愛人と一緒に逃げたのか、と思っただが、あれではその可能性

は薄いな。」

先程の鈴木諒子の様子を見ると、彼女が洋一を隠していると考え難い、確かに彼

女が洋一を独占したいために彼を拉致、監禁した、と言うのは筋としては成立する、が、それなら何故今それをするのか、と言う点が引つかかる、また、彼女が洋一の搜索を依頼する、と言うわざわざ手の込んだやり方をするのも解せない。

「一寸整理してみましようか、まず社長は奥さんとの旅行を中止して軽井沢に行く事にして

ている、これはリゾートを買うと言う仕事の為です。」

「そしてそれに愛人の鈴木諒子連れて行く事になっている、これが火曜日の事。」

もつとも彼女を連れて行くのはこの軽井沢行きが決まった時に決めていたのかもしれないな。」

光彦の言葉を新一が引き継ぐ。

「そして金曜日、午後に弟さんの所へ向かった後、秘書さん、奥さん、鈴木さんの所へ連絡を入れた後、東京駅に向かって車を走らせて行方不明になる。」

光彦は腕組みをしながら考える。

「問題は、だ。」

新一は鞆を持ち替えて立ち止まる。

「何故失踪したのか、いや、そもそも失踪なのかどうか。」

「そうですね、僕はどうも失踪では無い、と思うのですけれども。」

新一の謎出しに光彦が答える、新一は教師のような感じで光彦に理由を言ってみろ、と問いかける。

「一つは金曜の午後に連絡をとった後、今日、奥さんにメールを入れるまで何処にも連絡

を入れていないこと、一緒にいる筈だった鈴木さんにすら何の連絡も寄越して来ない。

今一つは何故車好きの社長が車を置いて東京駅から出ようとした

のか、電車で行くつもりだったのか、しかし鈴木さんには車で行く事を前もって伝えていますし。

買い物をしたかったのなら別に車で途中でも出来たはずし。」

新一は心の中で、いいぞ、その調子だ光彦、と喜ぶ。

「それに何故メールだったのでしょうか、今朝のメールって切羽詰ったものではない感じで

したよね、何かの事件に巻き込まれたならもっと別の書き方をするだろうし、それより

携帯を持っているのだから電話した方が早いじゃないですか。」

「しかも奥さん同様に大切にしていた鈴木さんには、メールすらも送っていない。」

光彦の考えに、新一が補足を入れる、二人は再び歩き出す。

「どうも引つかかるんですね、車が。」

光彦は呟くように言う。

「連絡が無いのは連絡が出来なくなってしまったか、或いは、」

「既に連絡出来る状況に無い。」

光彦の言葉に新一が後を引き継ぐ、そしてその言葉の意味に二人は顔を見合わせる。

「車の件は、目暮警部からの連絡待ちだな。」

新一がそう言う、二人が考え込みながら、或いはその思考を巡らせながら黙って歩く。

「光彦君、遅いじゃない、何やっていたの。」

腕組みをして口調は怒っているものの、顔には笑顔がある白衣を着た女性が目の前に立っている。

「志保さん。」

光彦は顔を上げて彼女に呼びかけ、彼女に走り寄る。

「遅くなってすみません、何せ・・・」

「『事件で遅くなった。』でしょ、仕方ないわねえ。」

志保は新一お方を見て、ふん！ とため息をつく、と半分呆れたような表情を見せる。

「工藤君、この子はまだ小学生なんですからね、余り事件に首を突っ込ませないで頂戴。」

如何考えてもこれは保護者の台詞である、新一がホント、オメーの彼女は怖えーなあ、と耳打ちする。

「くうくうくうん、どうやら実験台にされたいらしいわねえ。」

志保の声のトーンが一段下がる、こめかみの辺りがひくひくしている。

いやいや白衣の彼女はとても恐ろしい、新一は、じゃ、光彦、勉強がんばれよー、との声を残して脱兎のごとく逃げ出した。

新一さんはよっぽど志保さんが天敵なんですね、と光彦が苦笑する。

「さあ、中に入って。」

志保が手招きをする、その彼女の顔をじっと光彦は見る。

「なあに、光彦君、私の顔に何か付いてる？」

「い、いえ、別に。」

光彦は真つ赤になつて首を横に振る。

彼にしてみれば、週末に見かけた志保のジュエリーショップの件が気にかかっているのだ

が、なかなか切り出せないでいる。

志保は変なの、と言つてクスツと笑う。

光彦はそれに一瞬、ムツとするが直ぐにその表情を隠して彼女の後についていった。

「ところでよう、結局社長の居所は分かったのか、光彦。」

翌日の学校帰り、光彦、歩美、元太の三人は並んで帰る道すがら、光彦にその後の状況

を尋ねる。

「いいえ、まだです、今日もこれから新一さんの所へ行くんですけど、何も手がかりが無くて。」

光彦はまだ、二人に昨日の新一との会話を伝えていない、まだ事件と決まったわけでは無いのでうかつな事を行って煽り立てるわけに行かない、ましてや昨日の元太の鈴木諒子に対する態度を見れば何おかいわんや、である。

其処へ新一が息を切らしながらやってくる。

「光彦、ここに居たか、探したぞ！」

「どうしたの、新一さん？」

「何か事件か？」

光彦より先に歩美と元太の二人が反応する。

「昨日見つかった車の件でおかしなことが出てきたから、一寸これから社長の家に行く、

光彦も来るだろ。」

「勿論です！」

新一の言葉に光彦は勢い込んで答える、四人は社長の飯宅であるマンションへ向かう。

そのマンションの部屋では大変な状況になっていた、部屋の中が荒れているのである、

さすがにガラスや陶器の破片が散乱していると言っほどではないが、ソファに乗っている

はずのクッションがすっ飛んでいたり、物が倒れていたりするのである。

誰かが暴れた、と言うのがその状況で分かる。

「そうよ、あの女の所よ！あの女狐！許さないんだから。」

荒れ狂っているのは社長夫人の章子である、それを秘書の和也が必死になって宥めてい

る。

「奥様、落ち着いてください、まだそうと決まった訳じゃないのですから。」

「いいえ、絶対そうよ！　そうに決まっているわ！　あの女の所へ連れて行って頂戴！」

彼女は取り乱していて、新一達がやって来たのにも気がついていない、物凄い勢いで暴れている。

新一は慌てて章子を取り押さえに入る。

「奥さん、落ち着いて、落ち着いて下さい！」

少年探偵団の面々は既に怯えて部屋の隅で小さくなっている。

章子は咄嗟に割り込んできた新一を見てすつと落ち着くのを感じた、慌てて身繕いをして

「ご、ごめんなさい、とんでもない所をお見せしてしまつて、と挨拶する。」

「いえ、それにしてもどうされたのですか、そのように取り乱されて。」

「主人の居場所が分かったのよ！、あの女の所よ、影でこそそこそ会っているだけじゃ物足

りなくなつて、とうとうあの人を攫つたのよ。」

新一の問いかけに彼女は再び興奮してきたようである。

「落ち着いてください、奥様、君、これ以上奥様を刺激するのは止めてくれ！」

秘書の和也が新一に向かって厳しい視線を投げかけながら言う、しかし新一は自信を持つて答える。

「昨日仰られていた方ならこの件には関りありませんよ。」

「何でそんな事が分かるの！あの女が何か言ってきたとでも言うの！」

章子はまだ納まりがつかないらしい。

「彼女も社長の事を探していらっしゃるようです、昨日とある人物に搜索の依頼を致して

おりました。」

「そうだけ、俺達もそれを見ていたんだからよ。」

元太が新一の言葉を補強する。章子は信じられない、と大きな声で怒鳴る。

「和也さん、貴方この事知っていたの。」

「ええ、ホテルに問い合わせた時に。」

章子の問いかけに、和也は申し訳なさそうに答える、昨日はああいう状況なのでご報告

するのは、はばかられましたので、と言いつをする。

「これは本当です、それより今日お伺いしたのはお尋ねしたい事があつたからです。」

新一の言葉に彼女は尋ねたい事？ と訝しげな顔をする。

「社長さんの車についてなんですが、社長さんは極度の綺麗好き、いや潔癖症みたいなも

のではありませんか？」

この言葉に一瞬、全員の視線が新一に集まった後、答えを聞く為に今度は章子の方へ移る。

「いいえ、確かに綺麗好きではあつたけど、そんなに病的な。と言うほどではないわ。」

「そうですね、私もお仕えて何年か経ちますが、そんなに潔癖症、と言うほどでは無い

ですよ。」

章子の答えに和也も同調する。

「そうですか、いや実は昨日発見された社長の車なんですが・・・」

「車がどうかしたの、そういえばまだ警察から返ってこないわね。」

章子が車の事を今思い出した、と言う風に答える。

「ええ、実は僕、警察にも少し顔が効きまして、大変申し訳ないの

ですが、勝手に調べさ

せていただいたんです。」

新一は多少ばつが悪そうな表情で彼女を見る。

「そう、いいわ、それで何か分かったの。」

「ええ、実はハンドルやドアノブに指紋が残っていないそうなので、何かで拭き取られ

たのではないか、或いはもしかすると手袋をして運転をなさるのか、とも思われたので

すが、無いのはハンドルとドアノブだけで、他にはたくさんついていたのでその可能性

は薄いだろうとの事です。」

新一の発言にそこに居た全ての人間が驚きの表情を見せる、そんな馬鹿な、と言うのが

その場に居た人の素直な感想であろう。

「それってどういう事かしら。」

わずかな時間の沈黙の後、章子が口を開く。

「分かりません、ただこういう事は考えられます、社長はおそらく何かの事件に巻き込ま

れた、犯人は社長が失踪したように見せかける為に車を東京駅地下の駐車場に置いたは

良いが、自分の指紋が残った部分を拭い去った、尤もそんな事をすれば社長の指紋も消

えてしまつて事件だとばれてしまつが、犯人が誰かは掴みにくくなる。」

「じゃあ主人は。」

彼女は最悪の事態を想像し、悲痛な表情を浮かべる、そこへ新一の携帯が鳴る、新一は

慌てて携帯をとると電話にでる、はい、はい、そうですか、有難うございました。と短い

返事をして切る。

「やはりあの女性の方は無関係のようです、今、警視庁の目暮警部から連絡があつて、ホ

テルには、彼女一人で泊まった事が確認されたとの事です。」

新一は電話の内容を手短に説明した。

そこで今まで黙っていた光彦が口を開いた。

「えーと、最後に社長さんに会つたのは社長の弟さんでしたよね、その時のお話を伺

いたいのですが、今どちらに居るか分かりますか？」

「ええ、今朝電話があつて、今日家の新居の基礎をするから、つて

」

「え、それは来週の話じゃなかったですか？」

章子の答えに、和也が少し驚いたように尋ねる。

「ええ、何か急に資材と人の都合がついたからつて。」

彼女が電話で受けた説明を和也に話す。

「ただ朝一番で貰った電話なので、もう事務所に戻っているかも知れないからそちらに行

つて見ましよう、和也さん、車を出して頂戴。」

彼女の命令に和也は承知しました、と車を取りに行った。

「やっぱりまだ事務所には戻っていないみたい、誰もいないわ。」

章子が事務所のドアを開けようとしてノブを回してみるが鍵がかかっているので開けら

れない。

「そうですか、では現場に行ってみるしかないのかな。」

新一は言ってみるが、丁度その時、表の道路工事の掘削機の音がひどくて聞き取れず、

和也が二度ほど聞き返す。

表に出てみると工事が今たけなわ、と言う感じで行われている。

「僕一寸工事の人達に話を聞いてきます！」

光彦の言葉に元太も俺も、と言ってついていく。

工事人達はどうかやら何も知らないようで、二言三言、言葉を交わすと直ぐに移るが、交通

整理をしていた人のところで、少し長く話していたようだった、二人の表情の変化から、

何か情報を掴んだ事が新一にも分かった、光彦は必死になってメモを取っている。

やがて険しい表情でこちらに急いで戻ってくると、新一の下に走り寄る。

「何か分かったか？光彦。」

「ええ、大変な事が、此処の事務所に金曜日社長さんらしき人が来たそうです、高級そう

な外車に乗っていたと言うから多分そうでしょう、で実はその後、その車に乗って出か

けたのは、その社長さんでは無くて此処の事務所の人だったそうです。」

「それで。」

「ところがその人、帰りはタクシーで帰ってきた、と言うんだ、なんだか怪しくねーか。」

新一の先を促す言葉に、元太が代わって答える。

皆の顔にそれぞれ疑念の表情が浮かぶ、和也が車のキーを廻し車が発進する。

「ねえ新一さん、もし先程の推理通りだとすると、奥さんへのメールは誰が打った物なのでしょうね。」

光彦は心に残っている疑問を口にする。

「本人ではないだろう、おそらく事件の犯人だと思う、その証拠に電話でなくメールだと

言う事、もし本人であるとするならば……。」

「あの女の人にもメールを送っているはずですよ、それが送って

いないと言う事は。」

「あのおばさんの存在を知らねーか、知っていても連絡方法が分かんなかった、と言うわけだろ、へへ、それくらいなら俺にも分かるぜ。」

新一の言葉を光彦、元太が順番に引き継ぐ、元太も大分勘が良くなってきたようである。

「でもなんでそんな手の込んだ事をしたのかしら、死ん出る事を隠すみたい。」

歩美が考え込むような表情をする、それを見て元太も考え込んでしまう。

「きつと犯人は社長さんが生きている、と思わせておかなきゃならないんですね、でも何故？」

光彦の言葉に新一はさあな、まだ社長が死んだ、と決まったわけじゃねーから、と答える、当然運転席と助手席に座っている二人を思いやっての事で、無論彼ももう社長は生きていないだろう、と言う結論に達している、生きていれば何らかの痕跡やその後の動きがあつて良いはずだからである。

その様なやり取りをしているうちに、建築現場に着く、どうやら盛んに人の動きが見られる。

同じように現場にいながらいでたちの異なる人間が一人、現場を見ながら時折指揮をしている。

その男に向かって章子が声をかける、男は振り返って笑顔を向けるが、同行している人物達を見て怪訝な顔になる。

「昨日お見えになった工藤新一さん達よ、貴方にお話が伺いたいん

ですって。」

建築現場は、先程の道路工事現場ほどでは無いにしろ、かなり大きな音が響いている。

章子は大声で浩二に伝える。

「分かった、こっちは危ないから今そっちへ行く。」

そう言つと、あちこちにおいてある資材や機材を避けながらこちらに向かつてくる。

「こういろいろな物があると、特に小さい子供には危険だから。」

元太達に暗に注意している、元太は少々むっとした表情を浮かべている。

「金曜日に社長さんが見えになられた件なのですが・・・」

「兄貴の件？あれは兄貴が旅に出たんじゃないの？昨日の話ではそう結論が出たんじゃな

かったけ？」

「どうもそうではないようです、実は発見された車のハンドルとドアノブに指紋が無かつ

たのです。」

「指紋が・・・無い？」

浩二の表情が険しくなる。

「どう言つ事なんだ？、指紋つて、車を調べたのか？」

彼の声も幾分険しいようになる、警察が介入した事に不快感を覚えたらしい。

「とりあえず事件の可能性は捨て切れませんから、それで貴方にお伺いしたかったのです。」

「俺に、何の為に。」

「実は先程貴方の事務所に行った時に、近くの工事現場からおかしな事を聞きました。」

「俺が兄貴の車を運転していた事か？」

浩二の方から不審な点を言い出した、新一は以外、と言う顔ををした。

「一寸こつちへ。」

章子の目を気にしながら新一達を一寸外れた所へ連れて行く

「兄貴の車を運転していた事を黙っていたのはすまない、言い訳のしようがない、だがあ

そこでそれを言う訳にはいかなかった、何しろ兄貴の愛人が絡んでいたからね。」

「どういう事です。」

浩二の答えに光彦が鋭く突っ込む。

「兄貴に頼まれたんだ、車をあそこに置いておいてくれ、とね、あの車は目立つからな、

商談相手に愛人を使っている所を見られる訳には行かないだろ、現地までは往復電車で

行つて歸りに東京駅から乗つて歸る、と言つていたんだ。」

「でも、相手の女性には車で行くから、と言つていたようですよ。」

光彦は尚も突っ込んでくる。

「おそらく途中で気が変わったんだらうよ、けど何らかの理由でそれを彼女に伝える事は

出来なかつたんじゃないかな、それより相手の女の人に会つたんだ。」

彼は答えながら反対に尋ねてくる、新一が、ええ、ひよんな所で彼女も社長を捜して

いましたよ、と付け加える、浩二はそうか、と呟く。

「じゃあハンドルとドアノブをの指紋をふき取つたのはどうなんだよ！」

今度は元太が突っ込みを入れる、浩二は今度は元太に向かって浩二がしゃべりだす。

「あれは違つんだ、兄貴の車を運転する直前までこの家の外観図を描いていてね、手の汚

れているのに気が点かなかつたんだ、それでハンドルとドアのノブを汚してしまつてね、

車を降りるときに気がついて慌てて拭いたんだよ、兄貴の大切な車だからね。」

「高級車ですからね。」

新一が鋭い目つきで相槌を打つ、浩二は一瞬むっとした表情を見せたが、すぐにそうだね、と笑う。

「こんな事になるのなら拭かない方が良かったのかな。」

浩二は自嘲的に笑いながら新一に言う、新一は、さあ、と曖昧な返事をする。

「それに急に旅に出る気になったのも発作的にやった事だろうから、その時にあんな目立

つ車は置いていった方がいい、と判断したんじゃないかな、だからあそこに置きっぱな

しになつていたんじゃないかと思うんだが。」

浩二は自分なりの推理を披露する。

「それにしてもこの基礎工事、随分急だとの事ですけど。」

突然、新一が建築現場の方を向いて話題を変える、浩二が面食らったような表情になる。

「ああ、たまたま他の所の資材と人がキャンセルになってね、それでこちらに急遽廻す事が出来たんだ。」

浩二は事態の展開を読み込めないまま答える、新一はそうですか、と答える。

「でも良いんですか？肝心の建築主のお兄さんがいらっしやらないのに勝手に進めてしまつて。」

新一が浩二の方に向き直って、見ようによっては意地の悪い質問をする。

「別に、兄さんも完成を楽しみにしていたし、いつ帰るか分からない兄さんのためにいつ

「までも姉さんがマンション暮らし、と言う訳には行かないだろう。」

彼は章子の方を見ながらそう新一に言う、新一はなるほど、と言う表情をしてみせる。

「ところで僕らは、社長さんが何らかの事件に巻き込まれたと思っています、そして既に

もう生きてはいないのではないかと推測しています。」

新一の言葉の意味を理解した浩二は、つまり、と言い始める。

「俺が兄貴を殺した、と言うのか！、は！面白い、死体は何処に？まさか此処かい？・

・面白い推理じゃないか。」

笑っていたがその声には明らかに怒気がある。

浩二は振り返ると現場の作業員に大声で集まるよう支持を出した、わらわらと人が集まってくる。

「一寸作業を中止してくれ、悪いが今から基礎工事をしている所をすべて掘り返してくれ。」

作業員達はざわめき、不満の声を上げる、浩二はその声をなだめながら現場にてきぱきと指示を出す。

新一は最初、いや何もそこまで、と言っていたが、余りの勢いに黙ってしまった。

「どうやら死体なんてものは無かったようだね、君もあんまりにも殺人事件ばかり見ているものだから、何でも事件として捉えてしまうようになってしまったのじゃないかね。」

浩二は一寸意地の悪い言い方をする、新一は苦笑いをしながら、まあこういうことも有

りますよ、と言う。

「これで工期が狂ってしまいましたね、申し訳ありません。」

新一が素直に詫びる。

「なあに、元が早く始まったのだから気にする事はないさ。」

彼は勝ち誇った表情で新一を見る、新一は別に悔しがる訳でもなく工事現場を見つめている。

ひょんなことから大騒動になり、建築現場の敷地を殆ど掘り返す状況になってしまい、

その作業が終わったのは日没近くになってしまった。

新一達はその状況を他の面々と一緒に見ていた、こういうのを立って見ているだけでも結

構疲労を覚えるものだというのを再確認してしまう、これで何かしら発見されれば良いの

だろうが、何も無ければ徒労に帰することになる。

そして今、新一は今、後者になるのを実感していた。

尤も新一は、彼が掘り返す指示を出した時点で、此处には死体は無い、と直感していた、

そして次の方向へ思考は走り出していた、だからその時点で元太と光彦の様子に気付いていない。

「なあ光彦、俺こんな様な事、どっかで見た事あるんだよなあ。」

元太が考え込みながら光彦に問いかける。

「元太君もですか、僕もなんです。」

光彦が同じように腕組みして難しい表情をしている、元太がえーと、なんだったけなあ、

と右手をおでこに当てる。

その表情を見て、光彦が急に何かを思い出したようにポン、と手を打つ、そしてあれだ！

と叫ぶと急に元太の耳元で何かをささやく、それを聞いた元太もそ

うだった、と言う顔を

してはあつと表情が明るくなる。

「つてことはよ、何もかもあの話とおんなじじゃねーか。」

元太が光彦に囁く、光彦はそうですね、と頷いた。

「うん、うん、そうなんだ、一寸先走りすぎたんだ、アイツが犯人なのは間違いねーよ。」

此処は工藤邸、今、新一は何処かに電話をしている、漏れて来る声のイントネーション

から、電話の相手は彼と並び称される西の名探偵らしい。

「ああ、一寸まずかったな、これで向こうも警戒するんじゃないかな。」

新一はそうとは言え余り深刻な表情はしていない、すぐに謎を解き明かしてしまいそうな雰囲気である。

「で、そっちは如何なんだ、え、何、またこっちへ来るだ！いい加減にしろ、あ、おい、

服部、服部！、っちえ、切りやがった。」

彼は受話器に向かつてぶつぶつ言つと手荒く受話器を置く。

ふう、とため息をついて椅子に座り込むと、着ていた上着を脱ぐ。

「問題は死体を何処に隠しているか、だな、決定的証拠でもない限り警察もつかつには動

けねーだろうから。」

新一はポツリ、と呟いた。

時の針を見る、既に時刻は11時を回ろうとしている。

その時、玄関の呼び鈴を激しく鳴らす音がする。

「はい、はい、どなた。」

玄関に向かう、インターホンの呼び鈴の音は止まらない。

「わーってるって！うるせーなー！」

新一がドアを開ける、彼は自分の彼女だと思っていたのだが飛び込んだのはお隣さんだった。

「光彦君、来てない!？」

志保は蒼い顔をしている、余程心配しているのであろう、非常に慌てている様子が良く分かる。

「いや、来てねーけど、今日は夕方に分かれたっきりだ。」

志保はそれを聞くとますますパニックになる。

「それが帰ってからまた出かけたらしくて、まだ帰ってきてないのよ!、まったく、何処に行っちゃたのかしら。」

志保は頭を抱えながら玄関を折の中の熊のようにうろろろしている。

そこへ再び電話のベルが鳴る、新一は受話器を取る。

「もしもし、新一さん。」

「その声は歩美だな、どうした。」

「元太君、そっちに行ってない。」

「え、元太もか!？」

歩美の言葉に今度ばかりは新一も驚いてしまう、あの二人がいない、新一は考え込んでしまう。

「なんでも『謎が解けた』って出て行ったきりまだ帰ってこないんですって。」

歩美の言葉に新一は面食らってしまう。

「『謎が解けた』だって……そうか、しまった!光彦たちが危ない。」

そう言つと新一は夜の闇へ飛び出していった、その後を、工藤君、と叫んで志保が追いかけて行く。

その頃、建築事務所から一人の男が大きな荷物を抱えてワゴン車に乗り込み、発進させた。

たどり着いた先は、昼間の豊田邸新築現場、このあたりは住宅地である所為か、この時間になると人通りも殆ど無い。

男は現場に置いてあったスコップをとると穴を掘り始める、ある深さまで掘り進めると、

よし、と小さく呟く、おそらくは満足そうな表情を浮かべているのだろう。

「やっぱりお前だったんだな。」

声とともに、明かりが男を照らす、男は顔を隠す、がその光源が小さい事と、低い位置か

らだと言う事に気がつき、顔を隠していた腕を下す。

「全くあの作品のままですね、豊田浩二さん。」

光源は二つ、そして少年、と言うよりは子供の声。

「いけないなあ、僕達、子供はもうお家に帰って寝る時間だよ。」

昼間の子供達だ、と思うとホツとする、がそれは浩二の早計であった。

「その荷物、社長さんの死体でしょ、隠しても分かりますよ。」

光彦が浩二の脇に置いた荷物を見ながら言う、浩二の顔色が変わる。

「社長さんを生きているように見せかける手口、車を置いておく手口、建物の基礎部分を

掘り返させるなんて、そのままじゃねーか。」

小太りの男の子がちよつとどすを聞かせた声で浩二に言っている、浩二はそう言えば

そつだ、と苦笑する、何もかもあの話と一緒にではないか。

「よく分かったねえ、僕達、あの作品が出来た時、君達はまだ生まれていないだろう。」

スコップに寄りかかるようにして浩二は彼らと話し出す。

「ついこの間、ビデオをレンタルしたばかりだったんですよ、『パイルD-3の壁』をね。」

浩二はそうか、ビデオか、と呟いた。

「最初に引っかけたのは、車好きの社長が好きな車を置きっぱなしにして失踪なんかす

るでしょうか、確かに高級外車は目立ちますけれど、だからって車なし、って言うのも

車好きな人にとっては厳しいんじゃないんですか、かといってレンタカー、って言う

のも考えにくいですね。」

光彦の台詞に成る程、と彼は感心する。

「メールの件もそうです、何で奥さんにしか送らなかったんでしょう、何故あのお姉さん

には送らなかったのか、わざわざ一緒に軽井沢に行こう、と言った相手に送らない、と

言う事は無いでしょう、それは送らなかったんじゃない、送る事が出来なかったんです、

何故なら……。」

「そう、相手のメアドも携帯の電番も分からなかったからさ。」

浩二が光彦の台詞を途中で奪う。

「何処で私だと分かった？」

「うーん、やっぱり貴方が社長さんの車を運転して行った、と言う話を聞いた時でしたね、

でも本当なら、社長が死んだ事が分かるのが困るのが誰か、と言う事を考えた時に気が

つかなきゃいけなかったんですよ。」

「なんたって社長が死んだらオメーが社長しなきゃならないんだろ、

ふつーなら嬉しい話

「ただだよ、あんたにとつちや夢をつぶされちまうんだもんな。」

元太がニヤツと笑いながら言う。

遠くからパトカーのサイレンの音が響いてくる

「どうやらこの話も此処までのようですね。」

光彦が油断無く構えながら言う。

「まったく、日本にはあんなしつこい刑事はいないだろうと思っていたんだが、こんな小

僧供がいるとは思わなかったぜ。」

浩二は向かつてくるかと身構えていたが、どうやらそついう気力も無いらしい。

「おい、二人とも、何者なんだ？」

彼は二人に向かつて尋ねる。

「しょう……。」

「円谷光彦、小嶋元太、探偵さ。」

光彦の言葉をさえぎって、澄んだ声が響く、二人の前に現れる一人の少年の影。

工藤新一の登場であつた

「全く、無茶しやがって。」

翌日の午後、工藤邸、光彦と元太が新一の前にかしこまっている。昨夜あの後、二人は新一と志保、そして駆けつけた目暮警部にこつてり絞られた、何故なら遅くまで出かけて心配をかけさせた拳句、とんでもなく危険な事までしていたからである。

「全く、今回は工藤君が間に合ったから良かったものの、一歩間違えればどうなっていた

か分からなかったんだぞ。」

目暮警部などは本気で怒るわ、志保は志保で光彦に抱きついて、心配したのよ、と涙声

になっていたのである、二人は深く反省した……様子はどうもない様である。

むしろ新一を出し抜いた事で変な自信をつけてしまったようだ。

「いいか、こんな無茶、二度とするんじゃないぞ。」

新一が一応怒った振りをする。

「それにしてもよく解けたな、今回の事件。」

「だってよ、あの刑事番組と全くやってる事一緒なんだものな、光彦。」

「そうですよ、大体最後まで見れば犯人はちゃんと捕まってるんですから。」

元太と光彦が微笑みながら言っている。

「まあいい、ところで今回はお前達にこれを渡しておこう。」

新一はそう言うのと二人に封筒を渡す、二人はおそろおそろ封筒の中を見る、途端に二人は目を丸くする。

「こ、こんなにどうしたんです、新一さん。」

光彦が驚きの声を上げる。

「今回の事件はお前達の活躍で解決したようなものだからな、依頼料や褒賞はお前達がこ

の位もらってもおかしくないだろ。」

どうやらかなりの額が入っていたようである、元太などはこれならうな重何杯食べられ

るかな、とよだれをたらしながら想像している。

「この事はご両親にも伝えてあるからな、無駄遣いするんじゃないぞ。」

新一は釘を刺す、そこへ光彦が新一をお願いを申し出る。

「あの、これから買い物に付き合ってくださいか、一寸一人で行くのは恥ずかしいんで……」

ああ、いいぞ、と新一が言うと光彦は足に羽でも生えたのでは無いか、と言うような軽い足取りで新一を連れ出した。

その数時間後、光彦は阿笠邸を訪れる、ちょうど蘭と園子も一緒に顔を出す。

「あら、どうしたの、光彦君、今日は家庭教師の日ではないわよ。」
そう言う志保に向かって、光彦は真っ赤になりながら小さな包みを渡す。

「なあに、これ。」

志保は包みを開く、それはあのジュエリーショップで見ていた可愛いジュエリーだった。

「どうしたのこれ!」

「あの、今回の事件、僕らが解決したから依頼料僕らにくれて、あの、心配させたし、こ

の間これ見てたみいだっただんで、その、欲しいんだろうなとか思っ

て、あの・・・」
光彦は既にしどろもどろになっている、志保はそれに気付いたようでありがとう、と微笑む。

「でも無駄遣いしないようにね、貯金するなり、自分の欲しいもの買うなりしてね。」

「それなら大丈夫です、もう自分の物も買いましたから。」

志保の言葉に光彦は胸を張って答える。

「へえ、何を買ったの?」

「『刑事コロンボ』のDVD全集です!」

この言葉に志保は頭を抱え、園子はこりや二人の将来は見えたわ、と笑い、志保さんも

苦労するわね、と蘭は苦笑した。

「でも。新一さんが『俺に先に見せろ』って持っていかれちゃって・・・」

そういつて光彦はうなだれる。

「えー、新一のヤツ何考えてんのよー！」
蘭が物凄い剣幕で飛び出していった。

了

（後書き）

あとがきと言う名の言い訳

久々の投稿です、此処の所コメディが多かったので、一寸真面目な作品を書いてみました（何処が？と言う突っ込みは勘弁です）

とはいえあの有名な刑事ドラマのパクリ、と非難されても仕方ないような作品で恥ずかしい限りです。

パソコンが不安定だったり、家族の病気が今ひとつだったりでなかなか書く時間がありませんが、また何か書けるようでしたらお目汚しになると思いますがお付き合いくださいませ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0428a/>

名刑事は囁く

2010年10月12日01時39分発行